

悪役令嬢は
バッドエンドを回避したい



秋月朔夕

Sakuyu
Akiduki

目次

悪役令嬢はバッドエンドを回避したい	5
番外編	
悪役令嬢だってたまにはやり返したい	277
番外編	
悪役令嬢はバッドエンドから逃げられない	307
書き下ろし番外編	
シルヴィアのおねだり	351

悪役令嬢はバッドエンドを回避したい

プロローグ

彼の愛は遅効性の猛毒に似ている。

最初は気付くことなく甘やかされ、少しの違和感を抱く頃にはあつという間に包囲網を敷かれ、最終的にはドロドロに煮詰めた愛という名の猛毒にわたしは殺されるのだ。



グチュリグチュリと淫らな水の音が自分の中心から零れ出る。

鏡に映る自分は一糸纏まとわぬ姿。はしたなく足を広げ、背後で貫く男のモノを美味しうに啜くえ込んでいる。度重なる男との情交により、身体は快楽くわくに蕩たふけ、今や陥落寸前といったところ——それをなげなしの矜持こころでなんとか堪こらえようと唇を強く噛もうとしたのに、その僅かな抵抗すら男は許さなかった。

「シルヴィア。噛むのであれば私の指にしておきなさい」

言葉通りに彼はわたしの口内に長い指を割り入れる。けれど侵入した彼の指は柔らかく上顎をなぞり、次いで短い爪で舌を引っ搔く。それは明らかにわたしの官能を誘発させようとしているものだ。

「ふっ……んんっ」

漏れる声はどうにも甘く、息苦しさから頬が上気する。しかしその表情が男の劣情を煽ったのか、ゴクリと唾を呑み込む音が聞こえた。

自分を齧かる男おとこにこれ以上好き勝手はさせたくはない。せめてもの反抗で口内を犯す彼の指を噛もうとしても、すっかり力の抜けた身体では子猫がじゃれる程度の甘噛みとなってしまうことが悔しい。

「……まだ私に反発する余力があるのかい？」

言葉とは裏腹に彼の声は愉悅ゆゑを含んでいる。わたしのうなじを舌で舐めながら、時折吸い付いては赤い所有印を刻んでいく。ただでさえ皮膚が薄く、敏感な場所だ。その上、幾度と重ねられた行為によって、すっかり鋭敏になり、少し触れられただけで背筋に甘い痺れが走る。

自分の意思とは裏腹に淫らに反応するわたしが面白いのか男は執拗しやくおつに首筋を舌で責

め立てる。男の好きなように弄もてあそんで甚いた振ぶられるわたしはすっかり玩具おもちゃに成り下がった。それなのに、身体は男の与える快樂よろこに悦よろこんでしまう。

そうしてクタリと力が抜けたところで、男は反発した罰だといわんばかりに甚振いたぶられて赤く色付いた乳頭を引っ掻いた。痛いことをされているはずなのに、一際甘い声を上げた自分のはしたなさが恥はずかしくて仕方がない。うつむいて目を閉じると背後から自分を貫く彼の大きさがより鮮明に感じて、どこにも逃げ場がないように思える。

(今夜だけで何度抱かれたのかしら?)

朦朧とする意識の中で考えたところで、正しい数なんか数えられようもない。

「……シルヴィア、ほら目を開けて。鏡に映る自分の姿を見てごらん」

自分を呼ぶ男の声がやけに甘く、情欲を孕んでいる。恐々とした気持ちで命令に従ったのは、支配者である男の機嫌をこれ以上低下させないため。そもそも男の機嫌が悪いのは今宵、わたしが逃走を執行しようとしたからだ。綿密に算段を立て、男が王城に召集される時間を見計らって計画を実行したというのに、最初から全て筒抜けだったらしく、あっさりと捕まえられ、そのまま男の寝室に連れ込まれてしまったのだ。

部屋に入れられてすぐに、服は全て脱がされ、ベッドに腰を下ろした男の膝に抱えらる。無遠慮に足を開かれたことに対する羞恥は何度経験したところで慣れるものではない。

屈辱に顔を歪めるが、それ以上にわたしを辱めたのは普段設置されていないベッドの脇に用意された大きな姿見の存在だ。

(……なんで、こんなものか！)

鏡越しに男の目と視線が合わさる。理知的で鋭い鳶色とびいろの瞳を細め、困惑するわたしの様子を楽しんでいるように見え、悪趣味だと思った。

それは明らかにわたしの痴態を見せつけることを目的として置かれていた。視線を外そうとすれば、そのたびに意地悪く甚振いたぶられ、快樂の淵に追い詰めようとしてくる。

だから仕方ない気持ちで命令通りに臉まぶたを持ち上げると鏡に映る淫らな姿の自分と目が合った。燃えるような紅い髪は甘美な陶醉を表すかのように乱れ、キツい印象を抱かせるやや吊り上がったアーモンド型の瞳は与えられた悅樂よろこに媚びるように蕩けさせている。

わたしを抱く男はいくつもの勲章がついた豪奢な軍服をきちんと着込んでいるというのに、わたしだけが裸で抱え込まれていることが羞恥を増長させてならない。

「叔父様。お願いですから、もうやめてください……」

弱々しく首を横に振って、懇願しても、彼がこの行為を終わらせてくれないことくらいもう分かっている。

それでもせめてもの反抗として、鏡越しに叔父を涙目で睨みつければ、男は凶悪な笑みを浮かべた。

「嗚呼。きみは本当に男の情欲というものが分かっているね。そんなに快楽で蕩けた瞳で熱く私を見つめては、それこそ逆効果というものだよ」

ねっとりとした視線とは裏腹に彼はわたしの腰を浮かせ、容赦なく弱い場所を突き上げる。

既に限界だと思ってくらいに深く貫かれ、潤沢に濡れそぼったソコは細かく痙攣しながら、男根を搾り取ろうかとするかのように締め付ける。無意識のうちに彼を求め自分の姿を鏡で見ると恥ずかしさから肌が赤らむ。開いた足を閉じようと力を込めようとしても、男はいともたやすくそれを阻み、仕置だとして感じやすい陰核を容赦なく扱き上げた。

「ひっ、ああっ！」

強すぎる刺激に身も世もなく喘ぐことしかできず、簡単に絶頂させられ、身体を戦慄させる。真っ白になった思考の片隅で、どうしてこんなことになったのかとわたしは密かに嘆いた……

(もしも、もしも、この世界が乙女ゲームの世界だと思えば、レオンが異常

者だということを思い出さなければ、こんなことにならなかったのかしら?)

——その問いに答える者は残念ながら誰もいなかった。

第一章 受け入れたくない現実

記憶さえ戻らなければ、その日はシルヴィア・スカーレットの人生の中で間違いない最高の一日になるはずだった。

穏やかな午後の日差しに、王宮ご自慢の薔薇園でのお茶会。庭の角で王宮お抱えの音楽隊が奏でているのはこの国では有名な春の訪れを喜ぶ曲。初めての婚約者との顔合わせにはこれ以上ない程のシチュエーションが整えられている。

だからこそ失敗してはいけないと、隣に立つ母の横で背筋をしゃんと伸ばす。緊張を悟られないように笑みを浮かべながら挨拶の口上を述べれば、王妃からも合格だといわんばかりに微笑み返され、内心ほっとした。

——社交において笑顔は最大の武装であり、鎧でもあるといっていたのは教育係のニーナだったか。

今日の顔合わせのために朝早くから新調した赤いドレスに身を包み、燃えるように紅い髪は緩く巻き、薄くメイクを施された後に鏡で何度も出来栄を母によってチェック

させられていた。そのお陰でどの角度がより自分が魅力的に見えるかきちんと頭に叩き込んでいる。

人は美しいものが好きだ。

わたしは十歳にして周囲の大人達によってそのことをよく教え込まれていた。人よりも見た目が優れている分、注目や期待がされやすいことも自覚している。

教養や礼儀などのエチケットをしつかりと守らなければ、人からの反感も受けやすく、ひいては家名に傷をつける可能性すらあるだろう。

格式高い公爵家に生まれたからには、まだ子供だからということを理由に人前で粗相そそうをするのは許されない——まして自分の家よりも身分が高い相手なら尚更。

注目されることは慣れているし、それに対応するための社交術だって習ってきた。王家の人間が集まる場に参加することは初めてだけれど、お茶会だって何度も経験している。

恐らくそれらも全て、今日のための前座にすぎなかったのだろう。

両親は、回数を重ねてわたしが王族の前でも失敗なんかしないと踏んだからこそ、アルベルト殿下との顔合わせを計画したのだ。けれど……

「……うそでしょ？」

粗相をしないように気を張っていたつもりだった。しかし、王妃の背に隠されていた第一王子のアルベルト様と目を合わせた途端。頭の中でカチリとバズルのピースを嵌め込むような音が聞こえた気がして、その瞬間、礼儀作法をすっかり忘れたように、立ち尽くしてしまった。

「どうしたの？」

真っ先に声をかけたのはアルベルト様本人だった。

彼の挨拶を受ける前に、ぽかんと口を開け、まじまじと殿下を見つめるわたしは社交界においては無礼極まりない。

そんなわたしの態度を咎めることもなく、形の良い眉を下げてわたしの顔を覗き込む姿は、確かに噂で聞いていた心優しい王子そのものに見える。

本来であれば相手に安心感を与える態度のはずなのに、今のわたしにはどこか作り物みたいに思えて鳥肌が立つ。

(……どうして、彼が！)

きっと記憶さえ取り戻さなければ、わたしだって周囲の人間同様に王子の態度に感銘を受けたはずだった。

けれど、わたしは彼が『誰』であるかを正確に認識したせいで、本能的な恐怖から足

を震わせていた。

だってわたしは彼を思い出したのだ。

彼の本性も。

『悪役令嬢シルヴィア』に対する仕打ちも。

何もかも全て。

彼と目を合わせたことで思い出してしまった。

絶対にこの婚約を成立させてはならない。もしもそんなことをしてしまえば、わたしに待っているのは身の破滅だ。

その前に、王族の前で場を乱したことへの謝罪は口にしなければと思った。

それなのに幼い身体が膨大な知識量に耐えられなかったのか、ひゅうひゅうと息を吸い込めずに、呼吸が乱れる。目には生理的な涙が溜まり、視界がどんどんとぼやけていく。

「シルヴィアっ！」

胸を押さえながら倒れるわたしが最後に聞いたのは、切迫したお母様の声だった。

この日、シルヴィア・スカーレットは人生で最高になるはずだった日に人生最大の失態を犯すことになった。



（嘘でしょ。嘘でしょ！ どうしてわたしがよりもよって『最愛の果てに』の悪役令嬢になっているのっ!?!）

まだ戻らない意識の中でわたしがこんなにも怯えているのは先程思い出したばかりの前世の記憶のせいだ。

『最愛の果てに』は熱烈なファンに支えられていた乙女ゲームである。

その内容は乙女ゲームとしては王道中の王道で、美麗なキャラクターの甘い台詞に綺麗なスチル。元は十八禁だったけれど、後に全年齢版も発売され、普段乙女ゲームをしないライト層にもヒットし、社会現象にもなった。

そしてそれはわたし自身も同様に、そのゲームの全年齢版にどハマりした一人だ。

バイト代もキャラクター達のグッズにつき込んだし、ネットパトロールをして二次創作のイラストや小説を深夜まで読み漁るくらいにゲームに傾倒していた。

全年齢版『最愛の果てに』の大まかなストーリーの流れはこうだ。

ヒロインのアンジュは母と二人、貧しくとも慎ましくお互いを支え合いながらも生活していた。

しかし、アンジュが十四歳になった年に最愛の母が流行り病に倒れ、そのまま息を引き取ってしまう。

途方に暮れるアンジュの前に現れたのは身なりが整った貴族の男だった。

父親を名乗るその男により伯爵家に引き取られたアンジュだったが、屋敷でも通いはじめた貴族の名門校でも、出自のせいで遠巻きにされる毎日を送っていた。

自分に向けられる悪意に耐えきれなくなったアンジュは、学園の角にある東屋で王子であるアルベルト・ウインフリーと出会う。

自分のことを知らないアンジュに興味を抱いた王子は、身分を隠したまま彼女と親しくなっていくが、その状況を面白いと思わなかったのが幼い頃から王子の婚約者であるシルヴィアだった。

公爵家の令嬢であるシルヴィアは我儘わがままで傲慢な性格をしていて、気に入らない者は徹底的に叩き潰してきた。彼女の標となったことでアンジュの学園生活は波乱に満ちて

いく——

というのが、大まかなストーリーだ。

有名な絵師さんが作画したキャラのスタイルはとても綺麗だったし、卒業パーティーでのシルヴィアの断罪シーンは声優さんの演技も熱が入っていて迫力があつた。

それになんといつてもシナリオがとても秀逸で、王道なのに飽きがないというか、王道だからこそ素晴らしいというか、わたしはすっかりこのゲームの全年齢版に嵌まり込み、グッズ代で相当な金額を使い込んだ。

そして十八歳の誕生日を迎えた時に、十八禁版にも手を出してしまったのだ——それがライト層向けの全年齢版とは全くの別物であることは知らずに。

全年齢版『最愛の果てに』が胸キュン・ときめき・スクール甘ラブなら、十八禁版『最愛の果てに』は昼ドラもびつくりのドロドロ・エロ・グロの愛憎モノである。

驚いたのは元々の十八禁版では登場人物のトラウマが全年齢版よりも強く描かれていたために、彼らの性格まで歪であつたことだ。

メインヒーローの心優しい王子は主人公が泣く姿に興奮する腹黒サディストだし、頼れる騎士団長は、外は危ないからしまっちゃんやおうねと軽率に監禁しようとしてくるし、ちよっと生意気な弟キャラだった公爵子息は依存度増し増しで僕がいないと生きられない

いでしょと隙あらば洗脳してくる。宰相家の息子に至っては乙女ゲームのくせにバッドエンドしかない。

愛の重いキャラをそのまま受け入れることができれば、ハッピーエンドという名のメリバ。拒否すればヤンデレと化した攻略キャラ達の手で強制的にバッドエンドに叩き墮とされていく。

ちなみに悪役令嬢のシルヴィアは全年齢版であれば悪事が露呈した後には国外追放で済んでいたが、十八禁版では当然そんな甘っちょろいことにはなっていない。

悪役令嬢らしく高慢ちきで我儘で傍若無人なシルヴィアは誰にも好かれていない上に、十八禁版では更に過激な方法で主人公を虐め抜き、攻略キャラ達の地雷をぶち抜き。その結果、シルヴィアの悪事が露呈すると、これ幸いに攻略キャラ達の手によって地獄に叩き墮とされる。

王宮で密かに飼っている触手達に責められたり、変態貴族の愛玩奴隷にされたり、最底辺の娼婦に成り下がって輪姦プレイをされる日々を送ったりとシルヴィアの精神が壊れても尚、ひどい制裁は終わることはない。しかもゲーム中ではその描写がばっちりあるのだ。

(乙女ゲームで悪役令嬢の濡れ場……それもモブ姦メインだなんて一体誰に需要がある

のよ)

ざまあ展開にしたってひどすぎる。

何よりシルヴィアが幸せなルートは全年齢版でも十八禁版でも一つも存在しないのだから救いようがない。

あまりに碌ろくでもない展開しかないことで、口コミサイトでは悪役令嬢シルヴィアに対しての同情の声が多数寄せられている程だ。

『シルヴィアのエロは男性向けで不憫』

『胸糞すぎてシルヴィアのざまあシーンはスキップした』

『シナリオライターはシルヴィアになんか恨みでもあるの?』

『どのルートも地獄すぎるんだが……』

『約束された地獄』

『……シルヴィア不憫すぎてハッピーエンドの二次創作小説書いてみたんだけど、需要ある?』

『あなたが神か』

口コミがヒートアップしたせいかシルヴィアの二次創作物は多く、なんなら主人公ア
ンジュよりも二次創作では人気を博していたが、そんなことわたし自身がシルヴィアに
なった今、なんの救いにもならないし、ちっとも嬉しくない。

ふつふつと胸に込み上げてくるのは不安と絶望。その二つだけだ。

(嫌だ、嫌だ。シルヴィアなんて絶対に嫌！　なんでわたしがシルヴィアになっている
のよ)

たとえシルヴィアが二次創作でどれだけ幸せになっていたとしても、ゲームの世界に
は全く関係ない。

今のところ全年齢版と十八禁版どちらの世界か分からないけれど、シルヴィアに待つ
未来は程度の差はあれど、どちらも破滅という運命は変わらない。

(……こんなことならもう目覚めたくなかない！)

心の底からそう願っていたのに、その願いは虚しく、ある人物の善意によって阻まれ
ることになる。



「っ……シルヴィア。シルヴィアっ！」

「……ん」

「起きた？」

まだ夢の世界に逃げ込んでいたかっただのに肩を揺すられて、強引に現実へ呼び戻される。

(嗚呼、目を覚ましたくない。お願いだから今はそっとしておいて……)

嫌な夢を見ていた時のような脱力感で妙に身体がだるく重い。瞼を開けることすら億劫だ。このまま現実を直視せずに、ただ眠っていられたらどんなに楽なことか。

けれど一度反応した手前、王子である彼の声を無視し続けることも難しい。洪々ながら目を開ければ視界いっぱいアルベルトの顔が映り込む。

ベッドから上体を起こして部屋を見渡しても母達の姿はなく、王子と二人きりになっている。その理由を考える前に、アルベルトがわたしに話しかけた。

「無理やり起こしちゃってごめんね。その、少し魔まされていたから心配で……」

言葉通りに心配そうにこちらを見つめる王子の姿は、記憶さえ戻っていなければ純粋にときめくことができたろう。だが、今となっては彼の存在そのものが恐怖の対象でしかない。

(触手は嫌だ。触手は嫌だ。触手は絶対に、嫌だ！)

とはいえ今までわたしを看ていてくれたのは彼の善意だ。ひとまずお礼を言おうとした――が、その気持ちとは正反対にポロポロと勝手に涙が零れ出た。

(あれ。なんで……?)

おかしい。笑みを浮かべることくらい空気を吸うようなものなのに。瞬きよりも簡単なことで、どうして涙が流れるのか。

目まぐるしい情報の多さに幼子の身体に耐えきれなかったのか、それとも王子に対する本能的な恐怖心からなのか、感情が制御できない。

「ごめっ、ごめんさい」

「どうしたの？ まだ身体が辛いのか？」

泣きじゃくりながらの無様な謝罪に自分でも慌ててしまう。だけどわたしよりも更に慌てたのは王子の方だった。

婚約の顔合わせでいきなり倒れられて、魔まされているから起こしてやったというのに、

急に泣かれても彼からしたら訳が分からないだろう。それなのに、彼はぎよつと目を丸くしながらも優しく背中をさすって、わたしを落ち着かせようしてくれている。

今のわたしと同じ十歳の小さな掌は子供特有の温もりがある。誰かを慰めることに慣れていないのか、少しぎこちないその動きになぜだか少し安心する。

「殿下っ、申し訳ございません」

ひつくひつくとえずきながら、ぼやける視界の端で彼を見れば困ったように頬を掻いていた。

「ううん。僕は大丈夫だよ。ただ少しきみは今日体調が悪かっただけでしよう？ だから気にしないで」

彼の言葉はわたしに言い訳の機会までも与えてくれた。それは遠回しな優しさだと思っ。

その言葉通りに体調が悪かったことにすれば、せいぜい父に苦言を呈されるくらいで済むのだろう。けれどこれは婚約破棄してもらえない絶好のチャンスでもあった。

未来の王妃が軟弱であったり、プレッシャーに弱かったりすれば国の沽券に関わる。だからこそわたしが倒れたことでお母様はあんなにも慌てた声を出したのだ。

「……いいえ。未来の国母を務める者がこのように軟弱ではこの先体裁を保つことができませぬわ。ですから殿下、この婚約はやめておきましょう？」

——涙を乱雑に拭って願望を口にすれば、王子がストンと感情を削ぎ落とした顔でこちらを見ていた。



(疲れた……)

自分の部屋に戻ってきた気安さからベッドにだらりと寝転がる。

今日はもう誰とも話したくない。

帰ってからすぐに人払いは済ませておいたので人目を気にする必要もない。今だけは心置きなく休むことができる。

目を瞑って、ふと脳裏に過るのは最後に見たアルベルトの顔。

感情を削ぎ落としたような顔を思い出すだけでぶるりと身体が震えた。

彼が言葉を発する前にタイミング良くお母様達がやってきたから、あの場はお開きになったけれど、もしもお母様達がやってこなかったらアルベルトは何を口にしたのだ

ろう？

(……きつと知らない方が幸せよね)

穏やかな笑みを浮かべている人が真顔になるだけでどうしてあんなに恐ろしいのか。ゲームでアルベルトが真顔になるのはヒロインに本性を曝け出す後半部分からだというのに、なぜわたしは初対面からあの表情を引き出すことに成功してしまったのか……特大の地雷を踏んだ気分だ。

(わたしから婚約破棄の話をしたのが嫌だったのかな?)

アルベルトは王族だ。

人に傅かれるのは慣れているというよりも、それが彼にとつての『普通』なのだろう。いくらわたしが公爵家の令嬢とはいえ、自分よりも身分の低い女がしゃべった発言をしたことに苛立った、というのなら合点がいく。

(そうよ。考えてみれば王子だってまだ十歳の子供じゃない)

わたしが知っているのはしよせんゲームの情報だ。

現段階のアルベルトはまだ幼く、ゲームの彼と比べると当たり前だけど経験値が違ってくる。その分の余裕もないのは当然のことだ。

それにわたしだって精神年齢では子供とはいえないくせに、記憶が戻ったからとはい

え、王族の前でありえない失態を犯してしまっただけだ。苛立ちから本性を曝け出してしまったアルベルトのことは言えない。

(何が『格式高い公爵家に生まれたからには、まだ子供だからということを理由に人前で粗相をすることは許されない』よ。しっかりやらかしちゃったじゃない!)

澄ました顔で格好つけようとしたり分だけ羞恥が更に募り、顔が赤くなる。それを誤魔化そうと枕を抱きしめれば、手に馴染む柔らかい感触に少しだけ安心する。

(……屋敷に帰る馬車、お母様と二人きりだからすごい気まずかったし)

帰りの馬車ではお母様は難しい顔をして黙り込んでいた上に、わたしも失態を自覚していたため、喋りかける勇気が持てずにいた。

そのせいか屋敷に到着するまでの時間がとてもなく長く感じたのだ。

母の口からこの顛末を父に報告されるのだろうかと思うと憂鬱で仕方がない。父の冷やかな眼差しを思い出すだけで、背筋がぶるりと震える。

(……だけど今は王子のこともそうだけど他の攻略キャラのことも考えなきゃいけないわね)

決して後回しにしている問題ではないけれど、事態は急を要する。

だって恐ろしいことにこの屋敷には『最愛の果てに』の攻略対象者が二人もいるのだ

から。

一人はシルヴィアの『義兄』であるウィリアム・スカレットだ。

年齢は十歳年上で、穏やかで礼儀正しい彼は現在、主に騎士団の宿舎で生活している。将来は叔父のレオンと同じく騎士団の総帥に昇り詰めると言われる程、将来を有望視されている人物だ。

十八禁版のウィリアムの設定を思い出す。

ウィリアムは幼い頃、スカレット公爵家に引き取られる。血縁関係の薄い彼がどうして公爵家に引き取られたのかというと、わたしが生まれるまで公爵家に中々子供がでなかつたせいだ。

わたしの両親は貴族としては珍しく恋愛結婚であつたのだが、跡取りが生まれず、親族は父に愛人を娶るように進言していた。

けれども父はそれを両断し、スカレット家に連なる親族の子供を引き取って、その子を次期当主として育てると宣言した。

結果として公爵家に引き取られた子供——ウィリアムは養父であるわたしの父にひどく感謝していた。

ウィリアムの母親は元はただの使用人だった。しかし優れた容姿である彼女に目をつけたウィリアムの父が手を出し、愛人になったのだという。

その立場のせいでウィリアムは正妻やその子供達から躰しっけという名目で虐待されていた。

更にはウィリアムの母は正妻からの虐めに耐えきれず、彼を置いて屋敷を去ってしまった。

残つたのは自分に興味のない父と憎悪をたぎらせた正妻とその子供。

貴族の子息として適切な教育を受けるどころか食べ物すらほとんど与えられていない。更に恐ろしいのは、ウィリアムが少し粗相をするたびに躰しっけと称した折檻が待っていた。嬉々として与えられる暴力に侮蔑の言葉。

幼いウィリアムに抵抗する術なんかあるはずもない。

せめて被害を最小限に抑えようと自分に与えられた屋根裏部屋で息を潜めて過ごすしかなかつた。

寒さに震えながら身を締め込ませて、ただ暴力に耐え続ける惨めな生活——そんな生活から抜け出せたのは本当に運が良かったからだ。

たまたま公爵家夫婦に子供ができなかつたゆえの代打。

別に自分じゃなくても構わない。

むしろ確な教育を受けていない自分なんかよりも、公爵家の跡取りを目指すに相応しい人物がいくらでもいることは、ウィリアムだって分かっている。

けれどウィリアムは知ってしまった。

温かいスープの味を。

頭を撫でられる柔らかな感触を。

頑張った分だけ認められる嬉しさを。

知ってしまったからこそ手放したくなかった。

たとえ、うるさい親族を黙らせるための道具として引き取られたにしても、結果としてウィリアムは救われた。

その思いから自分を救ってくれた養父と養母の役に立ちたいと願うようになる。

ウィリアムは元来賢く、学んだことはすぐに覚えだし、屋敷に来たことで食生活は大幅に改善され、健康状態だつて良くなった。

正妻と子供達の顔色を窺つて生活していたことで、社交術も本人の知らぬうちに磨か

れていた。

周囲からの評判は上々であつたものの、彼の心中では常に不安が付き纏つていた。

どれだけ勉強しても、剣術で褒められても、優秀だと言われても、決して晴れることのない気持ち。

だつて自分はしよせん、公爵家に子供ができなかつたから引き取られただけの替えの大きく存在。

ただ運が良かっただけの紛い物。

偽物にすぎない自分の居場所は、本当にこの屋敷にあるのだろうか。そんな疑念がいつまでもウィリアムを苦しめる。

不安を少しでも払拭しようと彼は懸命に足掻こうとした。

だつというのに公爵家に子供が、シルヴィアが生まれてしまったのだ。

その翌年には、弟のミハエルまで……

公爵夫妻の『本当の』子供が生まれたことにより、ウィリアムは余計な跡目争いを起こさないように騎士学校に入り、騎士の道を目指すことを余儀なくされる。

『最愛の果てに』のゲームではウィリアムが騎士団長に就任し、貴族のパーティーで警護の指揮をしていたところ、ヒロインであるアンジュ・ヴィリエと出会うことになる。

伯爵家に引き取られたアンジュにとって初めてのパーティーだったが、上手くできるだろうかという不安から気分が悪くなり、外で体を休めようとしたところに酔っ払った貴族の男に絡まれ、そこに偶然現れたウイリアムが颯爽と助けたことがきっかけで二人は仲を深めていく。

だが、このルートでもヒロインの邪魔をするのが、わたしが転生したシルヴィア・スカーレットだ。

シルヴィアは幼い頃、ウイリアムを純粹に兄として慕っていたし、尊敬していた。転機となったのはシルヴィアが十一歳の時。

悪意ある親戚によってウイリアムが本当の兄ではないと教えられ、幼いシルヴィアは動揺のあまり、ウイリアム本人に悪態を吐いてしまう。

そんなシルヴィアを見て義兄は『困ったフリ』をして曖昧に笑った。

もしも対峙する相手が観察力に優れたシルヴィアじゃなかったら、ウイリアムの笑みが張りぼてだと気付くことはなかっただろう。

呆然としたシルヴィアのその視線の意味をウイリアムだって分かっているだろうに、彼は決して表情を崩さなかった。

困ったフリ、気付かないフリ、それは言外にウイリアムにとってはシルヴィアのこと

なんかどうでもいいという宣言に他ならない。

ウイリアムにとって、シルヴィアはその他大勢の有象無象と同じ存在であったのだ。

大好きだったからこそ、シルヴィアはウイリアムを憎んだ。

そのくせ結局構ってほしくて会うたびに罵倒するようになる。

けれどウイリアムはやはりシルヴィアのことなんか気にする様子はない。

虚しさと悲しみでごちゃまぜになった歪な感情が年々シルヴィアの心を蝕んでいく。

そんな時だった。ウイリアムとアンジュが逢瀬を重ねている場面を見てしまったのは、

義兄がその女を見つめる瞳には確かな熱が籠っていて、自分に向けるものとはまるで違う。ひどく優しいものであった。

ウイリアムのそんな表情を初めて見たことに動揺し、シルヴィアはすぐに相手のことを調べた。

相手がウイリアムと年の近い大人の女性であれば、あるいは公爵家に匹敵する程の爵位が高い貴族の女性であれば、まだ納得できた。

だけど、相手は自分と同じ年の、それも平民上がりの凡庸な女だった。

そんな女がなぜ義兄を誑かすことに成功したのか。

シルヴィアが手にすることができなかった義兄の『特別』。

それを手にしたアンジュが尚更憎たらしくてたまらなかった。しかし皮肉なことに取り巻きを使って虐めても、社交界や学園で除け者にしても、暴漢に襲わせても、失敗に終わった。

それどころかそのたびにウィリアムのアンジュに対する庇護欲が高まり、より二人の仲が強固なものへと変わっていきただけだった。

どれだけ彼らの仲を引き裂こうとしても上手くいかないことに痺れを切らしたシルヴィアは、最後には自らナイフを手にし、アンジュの顔を切り刻もうと襲いかかる。

それを制したのもまたウィリアムだった。

二人の間に割り込んだウィリアムはアンジュの顔すれすれに振りかざされたナイフをその手で受け止めた。

抜き身のナイフは彼の硬い掌を切り裂き、ダラダラと血が流れ出る。だというのにウィリアムはこれでやっとシルヴィアを肅清する証拠ができた、と嬉しそうに笑ったのだ。

ウィリアムの宣言通り、シルヴィアはその後。庶民の子供のお小遣いでも買える程の最底辺の娼婦に成り下がって、何人もの客を休む間もなく相手にしなければならなくなった。

そんな日々を送るシルヴィアの元に一度だけウィリアムがやってくる。

公爵家令嬢だったシルヴィアが平民どころか貧困民の住人に犯される姿を見たウィリアムは愉快そうに高笑いした。

そこには義妹への情なんて欠片もない。むしろようやく邪魔な荷物を片付けることに成功したという達成感の悦びに満ち溢あふれていた。

——だって、シルヴィアがアンジュを追い詰めるたびに、ウィリアムの神経が密かにすり減っていったから。

本当はアンジュを危険な目に遭わせないように自分の手元に閉じ込めたかった。

シルヴィアがアンジュに危害を加えないか心配する気持ちが日に日に強まり、焦燥から眠れなかった。

せめて自分の部下をアンジュの護衛として傍に置いてくれないかと提言したというのに、彼女は困ったように笑うだけで決して頷いてはくれない。

何度も何度も危ない目に遭ったというのに、どうして自分の提案を拒絶するのだろう。外は危ないのに。

私の目の届くところにさえいたら守ってあげられるのに。

私だけがきみを守ってあげられるのに。
 どうして私の手を取ってくれない？

最初は純粋な心配だった気持ちがだんだんと焦燥となり、やがて心が闇に沈んでいく。そうして結局彼はシルヴィアの末路を見届けた後、その心の求める衝動のまま、アンジュを永遠に自分の部屋に閉じ込めたのだった。



——ウィリアムのルートを思い出したわたしはベッドに寝転んだまま頭を押さえていた。

(……え。もう地獄じゃん)

十八禁版のウィリアムルートではグッドエンドだろうとバッドエンドだろうとアンジュはウィリアムに監禁されることになる。

違いとしてはアンジュが同意しているかどうか。ただそれだけのことで救いも慈悲もない。

そんな男が自分の義兄なのだ。あまりの恐ろしさから全身に鳥肌が立つ。

「とうかシルヴィアが悪いとはいえ、義妹を娼婦に墮として高笑いする男ってやばくないか？」

人の心はどこにいった？

シルヴィアはブラコンを拗らせて自爆したことにより生き地獄に墮とされた訳だけれど、アンジュはもらい事故もいところである。

ウィリアムルートを思い出したこともあって、心情としてはできればなるべくウィリアムに近付きたくない。

けれどウィリアムから距離を取ることを選んだ場合、屋敷にいるもう一人の攻略キャラのウィリアムに対するブラコンという名の狂気が炸裂する恐れがあった。

(せめてこの世界が全年齢版であれば……)

全年齢版の場合、シルヴィアとウィリアムは少し仲の悪い程度の兄妹で、そこまでの確執はない。アンジュに対しては平民の成り上がり女が義姉になるなんて嫌だ、というだけの理由だから虐めに関してもそこまでひどいものではない。

ゆえに断罪後は公爵家を追い出されて規律の厳しい修道院で監視されながら一生過ごす程度で済むのだ。

まだ十八禁版か全年齢版か分からないのなら、今のところは最悪の場合を想定して動くべきだろう——となると、わたしがこれから起こす行動は決まっている。

「ウィリアムお兄様いらっしやいませんか？」

彼の部屋まで訪ねて規則正しくノックすれば、すぐに目的の人物は微笑んで出迎えてくれた。

その笑みは見惚れる程、美しい。

燃えるような赤髪が多いスカレット家にしては珍しい絹のような艶やかな黒髪に、日に焼けない白く透き通った肌。

エメラルドの瞳にはどこかアンニュイな色気を感じる。これでまだ二十歳になったばかりなのだから末恐ろしいものだ。

メイドを呼び出してお茶を用意させるウィリアムと向かい合うようにソファーに座る。「シルヴィアが私の部屋までやってくるなんて珍しいね。何か用があったのかな？」

そう。恐らく二人の関係は現時点ではまだ、仲の良い兄妹であるはずだ。

確かにいつものシルヴィアであれば忙しい兄に遠慮して、彼の部屋まで訪ねることはしない。

しかし記憶を取り戻した今のわたしは別だ。

ウィリアムが現段階で『シルヴィア』をどう思っているのか、この目で冷静に確かめる必要があった。

『義兄』であることを悪意の塊みたいな親戚達に教えられたことが原因で、シルヴィアとウィリアムの仲は拗れるようになる。

ウィリアムだって自分に懐いてくれる年の離れた義妹に対して家族としての情くらは抱いていたはずだ。たとえそれが複雑なものであったとしても。

その関係を崩したのはシルヴィア自身。

『義兄』と分かった途端、長年にわたってウィリアムに粘着質に絡んだ挙句、彼の一等大事な『特別』に手をかけようとしたことで憎まれてしまった。

だったら同じ轍を踏まなければいい。

純粹に『妹』として彼を慕い、頼って、素直に彼を肯定すれば、関係性が変に歪むこともないはずだ。

それにウィリアムはどこか自己肯定感が低いところがあって、人から頼られるのが嬉しいのだと、ゲームのシナリオで知っている。

——であれば、おあつらえ向きにわたしは今日王子の前で失態を犯したばかりだ。

消沈している姿を見せて、ウィリアムの庇護欲を少しでも掻き立てられたらいい。そんな目論見を抱いたからこそ、重たい体を引きずってやってきたのだ。

（我ながら小狡い真似をしているわよね）

「ただ、ウィリアムが絆されるか否かにわたしの今後の人生がかかっているのだから、なりふりは構ってられない。」

「何も……ただウィリアムお兄様とお話ししたかったから、と言えば怒りますか？」

「いや。可愛い妹がそんなこと言ってくれるなんて、むしろ嬉しい限りだよ」

模範的な彼の返事に曖昧に微笑んで、場を保たせる。

紅茶を飲むウィリアムの姿は優雅で、思わず見惚れそうになった。

（ウィリアムが一番の推しだったからなあ）

けれど今心臓がドギマギしているのは、推しを見て興奮しているというよりは、ウィリアムの手にかけてられたシルヴィアの末路が恐ろしいからかもしれない。

——なんて嬉しくない吊橋効果なのだろう。

「ウィリアムお兄様はいつもお忙しいようですから。これでもわたくし、我慢するようになっているのですよ」

「シルヴィアならいつでも歓迎するよ。久しぶりに私の膝の上で本でも読んであげよう

か？」

「まあ。わたくしはもう十歳なんですから、そんなことで喜ぶ子供じゃありません。ですが、ウィリアムお兄様さえよろしければ、少し甘えさせてください」

「……シルヴィア？」

唐突に立ち上がったわたしに驚いたように、ピクリとウィリアムの片眉が上がる。

そのまま彼の膝の上に座り、向かい合う形でぎゅつと背中を抱きしめれば、ウィリアムの心臓の音が聞こえた。

突然の行動に多少は驚いたであろうに、彼の鼓動は規則正しい。

それはウィリアムにとってシルヴィアがまだ『特別』な存在になれていないことを意味する。

だからこそ、ぎゅつと力を込めて抱きついて縋^{すが}った。そんなわたしに彼は背中^{すが}に手を回し、ゆっくりと子供をあやすように優しく背中を叩く。

ウィリアムの手は幼い頃から剣を握っていたからか掌が硬く大きい。いくつもある剣ダコは彼が努力してきた証でもある。

「どうしたの？」

「……今日のお茶会で失敗してしまったの」

せつかく王子との顔合わせのために整えられた舞台。実際のところ、それが自分の失態で芳しく^{かんば}ない結果となったことは嘘偽りなく心苦しい。

彼は励ますようにして、わたしの頭を撫でた。

「シルヴィアが社交で失敗するなんて珍しいね」

「せっかくのアルベルト殿下との顔合わせだというのに、ご挨拶もできないまま緊張から倒れてしまって……帰りの馬車の中、お母様が無言だったから、すごく気まずい思いでしたわ」

ぼそぼそとした声で、ことのあらましを大体の真実と少しの嘘を混ぜて喋れば、彼は大丈夫だと口にする。

「安心しなさい。そんなことくらいで婚約は破棄にはならない」

できれば婚約破棄になってくれた方が有り難い。

だけど本音を言う訳にはいかないので、こてりと首を傾げておいた。

「本当？」

「ああ、もちろんさ。私がシルヴィアに嘘を言ったことはあるかい？」

確かに彼は嘘を言ったりはしない。

ただ真実を黙っているだけだ。

たとえば、アルベルト殿下とわたしが婚約した理由とか。

「……ないわ」

「だろう？ 私は可愛いシルヴィアに嘘なんかつかないさ。だから安心するといい」

慰めるようにおでこにキスを落とされて、思わず顔が赤くなる。

彼はそんなわたしの態度におやと面白そうに口端を上げた。

「ウィリアムお兄様。わたくしは立派なレディになったのですから、過度な接触は困りますわ」

「今まで散々してきたのに？」

そこまで頻繁に『兄妹』としての交流があった訳ではない。

珍しく意地悪気に笑うウィリアムの、その瞳の奥には確かな愉悦が混ざっていて、明らかわれたのだろうと分かっている。羞恥で顔が赤くなる。

記憶を取り戻してからなぜか感情の制御がきまにくいのは、未だにシルヴィアであった自分と、前世のわたしの人格に混乱があって、それが長引いているからかもしれない。

「ウィリアムの馬鹿。意地悪っ！」

悔し紛れ^{まぎ}に罵倒をすれば、彼の心臓がドクリと大きく音を立てた。

（えっ、なんでここで動揺しているの？ ウィリアムはアルベルトと違って相手を泣か

す趣味はないはずでしよう？」

そう思ってからすぐに思い至った。

「はっ！ 分かった。わたしが悪口を言ったからムカついたのね」

ゲームではシルヴィアに罵倒されていても涼しい顔をしていたけれど、書かれていなかっただけで内心は怒り心頭だったのかもしれない。

だとしたらまずい。

慌ててフォローするように口を挟む。

「嘘っ！ 本当は大好きよ。悪口を言ってごめんさい」

素早く謝罪して、おどおどと彼の顔を見れば、一体どうしたのか口元を押さえていて、耳が赤くなっていた。

それに驚いて瞬きしたところで、部屋にノックの音が響き渡る。

ウィリアムはわたしと顔を見合わせた後に、部屋の扉を開けることは許可せず、わたしを抱きしめた状態で応対することを選んだ。

「……夜分に申し訳ありません」

「いや、いいさ。それより用件はなんだ」

「そちらにシルヴィア様はいらっしゃいますでしょうか？」

「ええ。いるわ。どうかして？」

「実は……先程王城から使いがありまして、明日、アルベルト殿下がシルヴィア様のお見舞いにスカーレット公爵家に行ってくるとのことですよ」

年若いメイドの声は興奮から早口だった。きつと王族が自分の働く屋敷に来訪することが誇らしいのだろう。

反面、わたしは今日の失敗もあって、次にまた失敗したらどうしようと考えてしまう。プレッシャーが心に重くのしかかり、背中に冷や汗が流れる。

「——そう。分かったわ」

動揺を悟られないように短く返事をする、メイドはそのまま足早に去っていった様子だった。握って白くなった拳をやわやわと解くと、温めるようにしてウィリアムの手が重ねられた。

「ずいぶんと手が冷たくなっているよ」

「……まだ、身体の調子が戻っていないようで」

「ああ。そのようだ。だから少しは私に甘えても良いんだよ」

「ウィリアムお兄様？」

「シルヴィアが明日のアルベルト殿下の訪問を不安に思っているようであれば、私も同

席しようか？」

「思いもしない提案にわたしは目を丸くする。いつものウイリアムであればざらりと流すはずなのに、今日の彼はなぜだか乗り気である。」

「ただ残念ながら、わたしにはいきなり攻略キャラ二人を相手にできる自信はない。「ウイリアムお兄様のお気持ちだけで十分です。けれど、もしもわたくしに対応できないことがありますら、お呼びしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、もちろん。いつでも呼びなさい。可愛いお前の頼みならいつでも駆けつけるさ」

殊勝に尋ねれば彼はあっさり引いたが、ほんの一瞬だけ眉根を寄せたのをわたしは見逃さなかった。

しかし彼はすぐさま微笑を浮かべ、わたしの部屋まで送ってくれた。

部屋までエスコートする彼の様子もいつもと変わらないものに見える。

完璧なエスコートに完璧な微笑み。

あまりにもできすぎていて逆に不自然に思えたのは、記憶を取り戻して疑心暗鬼になっっているからなのだろうか。

払拭できない不安を抱きながら、わたしはなんとか眠ろうとした。



翌日、アルベルトは約束通りにやってきた。

見舞いという名目だったので、両親と共にわたしが玄関先に出ていくことはなく、自分の部屋のベッドの上で出迎えることとなった。

倒れたばかりなのだから騒がしいのは好まないだろうという配慮から部屋に二人きりにされて、なんだか心細い。

アルベルトを前にして思い出すのは最後に見た彼の、ストーンと感情を削ぎ落とした顔。世間話にもそれを思い出してしまい、どうにも息苦しい。

(こんなことならウイリアムお兄様にも同席してもらえば良かったかしら)

何かあればすぐに呼んでいいと言っていたけれど、さすがに気まずいからというだけで呼ぶのは忍びない。

「……シルヴィア。何を考えている？」

「何も。ただ殿下のことを考えております」

勘の鋭い彼はすぐにわたしが心ここにあらずになつていたことを悟つたらしい。婚約者として模範的な返答をしても、その瞳はどこか剣呑で、じっとこちらを見ているものだから身じろぎすら躊躇ためらわれる。

見つめ合つた末、唐突に口火を切つたのはアルベルトだった。

「……………どうやらきみは僕との婚姻に乗り気ではないようだね」

「いいえっ！ そのようなことは決して…………」

真実を言い当てられて狼狽うろたえる。

現にアルベルトに婚約破棄を申し出たのはわたし自身だ。その事実があつたから最後の声は萎む程に小さくなつてしまふ。

彼はふうつと溜息を吐き出して、眉間の皺を揉んだ。

子供らしくない動作だというのに、それが妙に慣れてみえるのは『王子』という重責を背負っているからなのかもしれない。

「ここには僕とシルヴィアしかいないのだし、何を話しても構わない。この部屋で話すことは不問になるとアルベルト・ウィンフリーの名において約束しよう。だから、シルヴィア。きみの本音を聞かせてくれないか？」

懇願の形をとっているが、それはハッキリとした命令であつた。

じつとりと掌に嫌な汗が溜まる。

こんなことならウィリアムに同席してもらえば良かったと心の底から後悔して、弱気になつた自分を奮い立たせるように唇を噛んでから、彼にもう一度向き合う。

改めて姿勢を正し、彼を見つめる。アルベルトはベッド近くにある椅子に座つたまま動く様子はなく、わたしの返答を静かに待っていた。

「アルベルト殿下ご自身としてはこの婚約をどのようにお考えですか？」

「……………今回は婚約をやめておこうとは言わないんだね」

「……………殿下」

「今の発言は撤回する。どうやらあの時、シルヴィアの言ったことを未だに引きずっていたみたいで、つい意地悪を言つてしまった。本当に余裕がなくて格好悪いから、忘れてくれると嬉しい」

わたしから婚約破棄を宣言したことは余程彼のプライドを傷付けてしまったらしい。

気まずそうに頬を掻くアルベルトにうなずけば、彼の顔は少しだけ緩んだ。

「わたくしもアルベルト殿下に失礼なことを言つてしまいましたから、殿下も忘れてくださるのなら助かります」

「ありがとう。……………それで婚約についての話だったね。『僕自身』の意思を聞いている

ということではないかな？」

「ええ。アルベルト殿下のご両親もスカレット公爵家と同じく恋愛結婚だと聞いております。であれば、憧れがあってもおかしくはないかと。この婚約はわたくし達だけでやすやすと破棄できるものではありませんが」

そう。これはただの縁談じゃない。王家と公爵家の関係を強くするいわば同盟的な役割が強い。

貴族同士の婚姻はほとんどが政略的なものであり、あまり本人達の意思は重要ではない。

ただ、アルベルトの両親である国王夫妻も恋愛結婚で、実はそのことがわたし達の婚約に大きく関係しているのだ。

スカレット公爵家と対をなすヴァイオレット公爵家。両公爵家はどちらも国で一、二を争う名家だ。

けれどヴァイオレット家は先代、先代と続けて子女を王家に嫁がせることに成功していた。

結果、ヴァイオレット公爵家の力が増し、拮抗していたスカレット公爵家の立場は弱くなった。

均等を保っていた勢力が崩れば、悪い意味で国内の情勢だって変わる。

宰相位の実権がヴァイオレット公爵家に二代にわたって握られたことにより、ヴァイオレット家にとって都合が良いように人事が采配されるようになった。

政治的腐敗が進み、文官達はヴァイオレット公爵家の顔色を見て閣議を決定していく。そうなるとスカレット公爵家だって黙ってはいない。権力が多少弱まったとはいえ、

元はヴァイオレット公爵家と対をなす程の大貴族だ。

剣術に秀でている者が多いスカレット公爵家には、分家も含めて騎士の重役の立場として国を守る者も多く、歴史を紐解けば国を救った英雄だっている。そのため、国民からの信頼は未だ厚い。

だからこそスカレット家は王家にとって脅威のままだった。

金も爵位も軍事権もあるスカレット公爵家が本気を出せばあつという間に国は傾く。その不満を抑え込むためにもアルベルトの父……現王の代でスカレット家から一人、国母となる女性を娶り、国内のパワーバランスを調整する必要があった。

だというのに、陛下はよりもよってヴァイオレット公爵家の女性に恋をしてしまったのだ。

事実を知ったスカレット公爵家は激怒した。